

冠動脈手術前のアスピリンで出血リスクは高まらない

冠動脈疾患患者の多くは、心筋梗塞・脳卒中・死亡の1次または2次予防のためにアスピリンを投与されている。アスピリンは出血リスクを高めるが、冠動脈手術前に投与を中止するべきかについては明らかにされていない。そこで本研究では、冠動脈手術を予定している高リスク患者の、アスピリン投与による死亡および血栓性合併症、出血のリスクへの影響について検討した。

対象は、冠動脈手術が予定されている周術期合併症リスクを有する患者とし、5カ国19施設で患者登録が行われた。対象者2,100例はアスピリン群(1,047例)またはアスピリンとマッチさせたプラセボ群(1,053例)にランダムに割り付けられ、それぞれ手術の1~2時間前にアスピリン100mgまたはプラセボを投与された。結果、術後30日以内の死亡や血栓性合併症の発生率はアスピリン群19.3%、プラセボ群20.4%であった(相対リスク0.94、 $P=0.55$)。再手術を要する大出血の発生率は、アスピリン群1.8%、プラセボ群2.1% ($P=0.75$)、心タンポナーデはそれぞれ1.1%、0.4% ($P=0.08$)であった。したがって、冠動脈手術前のアスピリン術前投与は、死亡および血栓性合併症のリスクを低下させることはなく、出血リスクも高まらないことが示唆された。

出典：The New England Journal of Medicine. 2016; 374(8): 728-737